

高松大学発達科学部における学生による学外セミナーの企画・運営
—「君に見せたい子ども発達がある」というテーマのもとに—

向 居 暁 ・ 田 中 美 季 ・ 松 原 勝 敏

**The 3-day off-site freshman seminar planned and implemented
by students of faculty of Human Development, Takamatsu
University: Under the catchphrase of “We want to show you the
Department of Child Development”**

Akira Mukai, Miki Tanaka, Katsutoshi Matsubara

(Abstract)

The purpose of this paper is to introduce the off-site freshman seminar which is carefully planned and meticulously executed by students of faculty of Human Development, Takamatsu University. This project is carried out as a first-year experience program, and aimed at encouraging and promoting student initiative in college life.

key words : fresher orientation, off-site seminar, student initiative, first-year education

キーワード：新入生オリエンテーション，学外セミナー，学生主体，初年次教育

1. はじめに

平成20年度の入学式を終えてあまりもない4月11日の午前8時，発達科学部の新入生が大きな旅行かばんを手にして大学の正面玄関に集合していた。各々のかばんの中には、これからはじまる2泊3日の新入生学外セミナーに必要な着替えなどの準備物だけではなく、スタートしたばかりの大学生活への期待，そして、不安が詰まっている。「1号車の1年生は先にバスに乗ってくださ～い，2号車の人はもう少し待機しておいてくださ～

い」。大きな声をかけて新入生を取り仕切っているのが発達科学部新2年生（平成19年度入学生）の学外セミナー委員である。「先生方も指定のバスに乗ってくださいね」。教員も2年生に促されて、バスに乗り込む。各バスの点呼担当の2年生は、バスに乗り遅れている学生がいないかどうかリストを使って確認し、バス同士で連絡をとる。点呼が完了し、その他の準備が整うと、発達科学部の学生と教員を乗せた2台のバスは、最初の目的地のユニバーサル・スタジオ・ジャパンに向け、大学を後にした。

実は、その日のその時刻、大学の正面玄関に集合していたのは発達科学部の学生だけではない。高松大学経営学部の1年生、高松短期大学保育学科・秘書科の1年生・2年生も大挙をなして、大きな旅行かばんの間に所狭しと身を埋め、出発の時を待っていた。このように、高松大学・高松短期大学では、毎年4月当初の入学式を終えてまもない時期に、新入生学外セミナーを行っている。

しかしながら、ここで触れておきたいのは、発達科学部の学外セミナーと経営学部、および、短大の各学科の学外セミナーには大きな相違点があることである。それは、発達科学部の新入生学外セミナーが、学生の企画・運営によって行われていることだ。そのため、他学部・学科の1泊2日の旅程と異なり、発達科学部だけが2泊3日となっており、そこには新2年生になったばかりの学生たちが、ほぼ1年間、長きにわたって準備し、企画した様々な活動が織り込まれているのである。学生の企画・運営による新入生学外セミナーは本年度でまだ2度目であるが、このような学生の主体的な活動が今後も継続され、発達科学部の伝統になってほしいと考えている。

本稿では、平成20年4月に終えたばかりの平成19年度入学生の企画・運営による平成20年度新入生学外セミナーを、その礎を築いた昨年度の平成18年度入学生（第一期生）のものと比較しながら報告する。

2. 発達科学部が「学生の主体性の育成」を重視するねらい

平成18年度に高松大学発達科学部子ども発達学科が開設されてから、新入生を迎え入れるはこの4月で3度目となった。つまり、現在（平成20年度）で3年生までそろい、平成21年度に完成年度を迎える新しい学部である。少子化により学生人口が減少していく中、入学定員を満たすことに苦戦してはいるものの、年を追うにつれて、少しずつではあるが入学者数は増加している。この生まれてまもない発達科学部においては、学部独自の学風

や学生気質、および、文化といった潜在的カリキュラムを形成することが重要な課題の一つとなっている。

文部科学省は、近年の教育改革の中で、自ら考え、主体的に判断し、問題を解決する力などの「生きる力」という理念を提唱し、その育成を改革の重点目標と定めてきた（中央教育審議会、1996）。2008年3月の学習指導要領改訂においても、この「生きる力」の育成は引き続き重視されている。この理念をさらに発展させ、具体化させたものに「人間力」がある。人間力とは、「社会を構成し運営するとともに、自律した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」とであると定義されている（人間力戦略研究会、2003）。21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、「知識基盤社会（knowledge-based society）」の時代であるといわれており、人間力を基盤とした、自ら考え、主体的に判断し、問題を解決する能力がますます重要になると考えられている（中央教育審議会、2005）。

また、大学進学率の上昇と少子化による学生人口の減少が同時に進行する中、大学を取り巻く諸問題のうち大きく取り上げられているのは、学生の学力低下の問題である（例えば、市川、2002参照）。石井・柳井・椎名・前田・鈴木・荒井・大竹（2005）は、全国の大学教員のうち6割以上が学生の学力低下を問題視していると報告している。全国保育士養成協議会（2006）も同様に、保育・幼児教育関係の大学・短大における学生の学力低下の問題を懸念している。ここで注目すべきことは、大学生の学力低下に関する議論においては、教科学力よりもむしろ主体性の低下や論理的思考力がより強く意識されているということである（荒井・鈴木・柳井、1999）。

このような時代背景も手伝って、発達科学部では、経営目標の一つとして「人間力の育成」を掲げており、その中でも、本学の建学の精神の一つである「自分で考え、自分で行なえる人間づくりをめざす大学」に基づいて、「学生主体の文化」を形成することを目指している。つまり、発達科学部においては、学生の意志・判断で行動することが重要視されていると所属学生一人ひとりが理解すること、ひいては、学生個人において「この発達科学部を所属学生自らの手によって主体的に創り上げていくのだ」という意識を形成することを目標としているのである。

学生主体の文化を形成するための具体的な施策の一つとしてあげられるのが、本稿の主題である「学生による新入生学外セミナーの企画・運営」である。新入生学外セミナーのような行事自体は決して珍しいものではない。多くの大学は、「新入生オリエンテーショ

ン」などと呼ばれる何らかの行事を実施し、大学精神に早く親しんでもらう場として、大学・学部・学科に関する様々な情報を提供し、その専門性に関係する導入教育を行う場として、また、同級生、上級生、教職員との出会いの場として活用している。その多くは、入学後まもない頃（4月上・中旬）に学外で宿泊する（1, 2泊）という形態で行われるようである。また、新入生オリエンテーションの実施とその評価や意義についての報告（例えば、出野・関島・工藤・宇良・梶原・斉藤, 2003; 武田・井藤・岡本・小嶋・原, 2004）や、新入生オリエンテーションの実施方法やその後の学生生活などへの効果に関して実証的に調査した研究（例えば、川上・坂田・佐久田・奥田, 2004; 奥田・川上・坂田・佐久田, 2003; 坂田・佐久田・奥田・川上, 2005; 坂田・佐久田・奥田・川上, 2007; 佐久田・奥田・川上・坂田, 2003; 佐久田・奥田・川上・坂田, 2008）なども少なからずみられる。高松短期大学秘書科においても、学外セミナーを導入教育の重要な構成要素と位置づけており、学生と教員の親睦を深めるとともに、礼儀作法やマナー、コミュニケーション能力などの向上を図る機会となるように創意工夫を凝らしている（高塚・山野・関・水口, 2008）。

ただし、これらの研究は、入学したばかりの新入生がどのように大学生活に適応していくのかということを中心とした研究対象としており、本稿のように、学生の主体性の育成を目標として、在学生がそのような行事を企画・運営していることについての報告は少ない。その中で、栗田（2001）は垂細垂大学において長年にわたって行われている学生企画による新入生オリエンテーションについて報告しており、このような行事を通して、ほぼ初対面に近い新入生をリードする体験は、上級生の人間的成長にとって有意義な体験となりうるとして、その意義を認めている。高松大学発達科学部においては、大半が、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭志望の学生であるため、学外セミナーにおける様々な活動において主体的に活動しながら集団をリードすることを通して、コミュニケーションやリーダーシップの重要性を学ぶことは、将来「先生」とよばれる職業に就くものにとって、有益で貴重な体験となるに違いない。

本来、学生の主体性が十分に発揮されるのはサークル活動などの課外活動だろうが、本学においては、そのような活動に積極的に取り組む学生が少なく、大学自体のサークルに対するサポート体制も決して十分だとはいえないのが現状である。このことは本学だけの問題ではない（例えば、関, 2003）。このように、学生の主体的な活動機会が少ない中で、新入生学外セミナーにおける学生主体の組織運営は、来たるべき社会において求められる

主体性を身につけるためのよい経験になると期待される。

3. 発達科学部における学生企画の新入生学外セミナーへの意欲の高まり

3.1 学生による学外セミナー企画の出発点

第一期生（平成18年度入学生）は、入学後まもなく、高松短期大学保育学科の1年生・2年生と合同で1泊2日の学外セミナーに参加した。いわば、彼らにとってこの学外セミナーは、保育学科の2年生に「連れていってもらい、歓迎された」学外セミナーだった。このようなかたちで発達科学部としてはじめての学外セミナーが終了してしばらくたった4月の終わり頃、学生たちから学外セミナーについての意見を聞く機会があった。それらの意見を集約すると、「来年は発達科学部の学生自らで発達科学部の新入生を歓迎したい」ということであった。しかしながら、高松短期大学の各学科では1年生、2年生合同で学外セミナーに参加し、2年生が新入生を「歓迎」という形式をとっているものの、高松大学のもう一つの学部である経営学部では新入生学外セミナーは新入生だけのものであって、2年生は参加することになっていないのである。発達科学部も当初、経営学部と同様の形式で学外セミナーを行う予定であり、2年次生の参加は見込んでいなかった。

ところが、日を迫るごとに学生たちの新入生を歓迎するセミナーを自分たちで企画・運営したいという意欲はますます高まるばかりであり、発達科学部の教員でも2年次生の学外セミナーの参加について正式に検討する必要に迫られた。折しも大学生の「主体性の問題」について発達科学部でも何らかの施策を打ち出す必要性があり、「学生による新入生学外セミナーの企画・運営」はその一つとして申し分のないものであった。教員の意見の中には、「学生たちの多くは、これまでに何らかの行事企画や運営に携わった経験に乏しく、実際の企画過程の煩雑さや運営の難しさについて理解しないまま、計画性のない意欲を表明しているに過ぎないのでは」という厳しいものがあった。しかし、学生の経験不足や能力不足を実行不可能な理由にしては、いつまでたっても行事企画の経験をすることはできないし、それを実現可能にするのに必要な能力も身につかないだろう。いずれにせよ、それらは教員のサポートによって補うことができるに違いないと思われた。協議の結果、発達科学部教員の総意のもと、学生の自発的な活動の芽を伸ばすべきだとの判断がくだされ、第一著者をサポート教員とし、その活動を積極的に後押しすることとなった。そして、平成18年6月半ばに4つあるゼミから学外セミナー委員が2人ずつ（計8人）が選

出され、第1回学外セミナー会議が開かれた。学外セミナー委員の会議はおよそ毎週1回のペースで行われ、平成19年度学外セミナーが実施される翌年の4月を目指して、計画が立てられた。このようにして学生企画による学外セミナーがスタートしたのである。

3.2 初年度の企画段階における反省点

初年度における企画段階の主要な反省点を簡単に述べると、まず、学外セミナー委員の中にも会議を重ねるごとに、長期にわたる計画性の必要性が理解できなかつたり、その過程の複雑さについて行けず、「やる気」を失うものがいたことがあげられる。つまり、ふたを開けてみれば、学外セミナーの企画は思っていたほどおもしろいものではなかったと感じたセミナー委員が発生してしまったということである。教員の不安が的中した。その結果として、一部のセミナー委員における仕事の負担が増大してしまった。また、セミナー委員は各ゼミの代表であり、学外セミナー会議で話し合われた議題などを他のゼミメンバーに伝える役割も果たさなければならないのであるが、セミナー委員のやる気が低下してしまったゼミではそれが伝わらずに、学外セミナーにおいてゼミ単位で行う活動の企画に支障をきたした。企画・実行すべての過程において、セミナー委員だけに限らず、やる気のある学生とそうでない学生には大きな差が見受けられた。また、サポートにあたった教員も、学生の主体性を重んじるばかりに、セミナー委員個人々のやる気の維持や学生全体の集団としての凝集性の維持に対する配慮を欠いてしまった。最終的に、リーダーとなってセミナー委員だけでなくその他の学生を率い、そして自らも最後まで多くの仕事をやり通した一人のセミナー委員の指揮のもと、学生によるはじめての学外セミナーは平成19年4月になんとか実行に移された。

次節では、これらの反省点を踏まえて行われた、学生による「平成20年度学外セミナーの企画・運営」について、昨年度と比較するかたちでその経緯を具体的に報告する。以下、便宜上、「平成20年度新入生学外セミナーの企画・運営」については「本年度」と表現を用い、「平成19年度新入生学外セミナーの企画・運営」については「昨年度」という表現を用いる。

4. 平成20年度新入生学外セミナー企画段階の概要

4.1 平成19年度学外セミナーの反省点の掘り起こし

はじめての学生企画による平成19年度新入生学外セミナーの実施後まもなく、その反省

会が、企画した平成18年度入学生（2年生）、歓迎された平成19年度新入生（1年生）それぞれ別々に行われた。

まず企画・運営に携わった2年生の反省会においては、「今年の学外セミナーと比べて楽しかった」、「2泊3日になって内容が充実していた」などという肯定的な意見も見受けられたが、やはり、セミナー委員の企画・運営に関する反省点が多くあがった。例えば、「予定を決めるのが遅かった」、「セミナー委員の段取りが悪かった」、「セミナー委員が組織化されてなかった」、「セミナー委員だけで準備をしていた」、「各種活動における学生の役割分担が不明確だった」、「ゼミ内での伝達不足があった」などがあげられた。

次にこれから企画に携わる1年生の反省会においては、活動内容に関して肯定的なもの（「出し物などがよかった」、「先輩の歓迎してくれる気持ちが伝わった」など）が多くあげられたが、同時に「1年生と2年生の交流する機会が十分ではなかった」、「活動内容についての指示やルールがわかりにくかった」に代表されるような、活動内容についての計画性の不備に関する意見が目立った。

4.2 学外セミナー委員の選考と第1回学外セミナー会議の開催

反省会の翌週、1年生の4つのゼミから学外セミナー委員が2人ずつ選出された。セミナー委員の選出に関しては、昨年度の反省を踏まえ、セミナー委員の役割や仕事内容、および、その重要性について、各ゼミ担当教員に連絡のうえ、注意事項として学生に周知してもらうように依頼した。そして、4月下旬に第1回学外セミナー会議が開かれた。参加者は、選ばれたばかりの1年生の学外セミナー委員（8名）、平成19年度の学外セミナーの企画・運営において中心的役割を果たした2年生のセミナー委員（5名）、昨年度より担当しているサポート教員（1名）であった。昨年度よりも約1ヶ月半以上早いスタートを切ったことになる。

第1回会議では、2年生のセミナー委員、および、サポート教員から昨年度の企画・運営における反省点が述べられた。その上で、経験者である2年生のセミナー委員が、1年生が中心となって行われる学外セミナーの企画・運営における実質的な援助を行うことが伝えられた。この点は、昨年度と大きく異なる点である。そして、昨年度と同様に、サポート教員は、旅行代理店との交渉など予算に関係することについて関与するものの、実際の企画・運営においては学生が主体的に行動してもらいたいため、その他についての関与は極力控えることも伝えられた。また、議題として、今後の学外セミナー会議の予定や

企画・運営における短期・長期計画について話し合われた。

4.3 学外セミナー会議の概略

(1) 学外セミナー会議の構成員

ほぼ毎週行われる会議には、特別な事情がない限り、1年生の学外セミナー委員は必ず参加するように求められた。やむを得ず欠席する場合は代理を立てることとなっていた。2年生についてはその制限を設けておらず、それぞれの学生の昨年度の企画における役割を踏まえたうえで、議題に応じて会議に出席するように求めた。結果的に、昨年度と異なり、1年生のセミナー委員はほぼ全員が脱落せずに会議に参加した。また途中から、新たに会議に参加希望した学生1名がセミナー委員に加わった。2年生に関しては、結果的にほとんどの会議に出席した学生は、昨年度の学外セミナーで最も中心的な役割を果たした学生1名だけであった。この学生は、企画段階においては、会議の運営やセミナー委員の個々人の特長などについて、サポート教員と細かく相談を重ね、1年生のセミナー委員の自主性を損なうことなく、彼らを統率した。また、本年度の学外セミナーにも参加し、実行段階においてもよきアドバイザーとなった。

会議におけるサポート教員の役割は、いわば、ワークショップにおけるコーディネーター（または、ファシリテーター）とよばれるものに相応すると考えられる。会議において、学生がもっている学外セミナーの企画に関係する能力を一人ひとりが発揮できるようにし、それらをうまくつないで、学外セミナーの企画が学生の共同創造となるようにしていく役割であるといえる（浅野，2006）。

(2) 学外セミナー会議議事録の作成

昨年度と同様、会議で話し合われた事柄については、書記担当によって議事録としてまとめられた。その議事録をもとに、1年生のセミナー委員はそれぞれのゼミで会議の内容を報告し、必要であれば議題について討議した。各ゼミでの討議結果はセミナー委員によってまとめられ、学外セミナー企画についての重要な資料とされた。昨年度においては、議事録の作成とその利用が不十分であったため、本年度の企画においては、議事録の作成についての役割分担の明確化、作成・配布にあたっての締め切りの厳守などについて十分な注意が2年生の委員よりなされた。

(3) 各ゼミでの議題の検討

会議の結果に応じて各ゼミに持ち帰ることとなった議題を討議する場について、発達科学部教員より、1年生のゼミ生が集まる「総合演習Ⅰ・Ⅱ」の時間を使用することについて了解を得ていた。しかし、昨年度は討議に時間を取りすぎたケースが多くみられたため、その時間が極力短くなるように工夫をするよう強く求められた。そのため、セミナー委員は昼休みなどにゼミ生を招集して、議論すべき事柄について前もって検討するなどし、その要請に応えた。

(4) 学外セミナー会議の開催回数

テスト前や休業中をのぞくほぼ毎週開催された公式会議は20回を超えた。夏期・冬期・春期休業中などに学生宅などで非公式に行われたものを加えると、その数は倍以上になるだろう。また、6月半ばには1年生全員とゼミ担当教員の参加のもと、学外セミナー全体会議が開かれた。すべての会議の運営は学生主導のもとに行われた。学生が主体的に学外セミナーを創り上げようと努力したことが伺える。

4.4 学外セミナー会議の議題

会議で検討された主な議題は、平成20年度新入生学外セミナーの「目的の決定」、その目的が達成できる「旅程・目的地の選択」、および「活動内容の決定」であった。

まず、会議で取り上げられた議題は、学外セミナー自体の目的についてであった。昨年度と同様に、「新入生と上級生が交流を深めること」、「新入生を楽しませること・新入生に楽しんでもらうこと」、「発達科学部らしい体験をすること」の3つに決定した。これらの目的を踏まえて、先に述べた全体会議において、昨年度と同じく2泊3日の旅程が選択された。また、目的地については、「楽しむ」という経験を重視するとの理由で、昨年度にならって初日はユニバーサル・スタジオ・ジャパン (USJ) に決定し、2日目と3日目は交流を深める活動をしたり、発達科学部らしい体験をするために青少年教育施設に決定した。初日がUSJということもあり、青少年教育施設については、兵庫県、大阪府、京都府の範囲からそれぞれセミナー委員で役割分担をし、目的地をいくつかの候補に絞った。そして、数ヶ月にわたる討議の結果、兵庫県丹波市にある「丹波少年自然の家」に決定した。青少年教育施設を決定する過程と同時に、活動内容についても討議が重ねられ、パーティ、運動会、キャンプファイヤなどの活動ごとにそれぞれの担当が決められた。これら

の過程は昨年度とほぼ同じであった（ちなみに昨年度は兵庫県美方郡香美町にある「兎和野高原野外教育センター」が選択された）。

また、先にも述べたように、必要に応じて、それぞれの議題を各ゼミに持ち帰ってもらい、各ゼミでの討議結果を学外セミナー会議における意志決定の重要な材料とした。

4.5 学外セミナー委員以外の学生を企画に「巻き込む」方略

昨年度の学外セミナー企画・運営の大きな反省点として、やる気のある学生とそうでない学生の差が目立っていたことがあげられる。実際のところ、学外セミナーはセミナー委員だけでは成り立たず、学年全員が役割を果たさなければスムーズな運営は望めない。また、新生が、上級生における「やる気の温度差」を感じ取れば、学外セミナーにおける活動の全体的な雰囲気にも影響しかねない。つまり、企画段階より、セミナー委員とその他多数の学生との協力体制を確立し、学外セミナーをみんなで創っていこうという意識を形成することが必要となる。

そのため、本年度は、サポート教員、および、2年生のセミナー委員から、繰り返し発せられた言葉は「セミナー委員以外のみんなを巻き込んでいこう」というものだった。昨年度と同様、ゼミ単位で活動における役割が分担されている。加えて、各種活動における小委員会を設置することによって、多くの学生が企画に参加するように工夫がなされた。その小委員会は、セミナー委員1人と各ゼミから2人以上のセミナー委員以外の学生から構成された。本年度は、「ハンドペイント」、「茶話会」、「合唱」で小委員会が設けられ、学外セミナー会議とは独立して、活動内容について活発な議論が行われた（活動内容の詳細は次節で紹介する）。

また、学年全体で何か活動を行うことが会議で提案され、協議の結果、全員で合唱を行うこととなった。実は、昨年度も全員で合唱をしようという計画は持ち上がったものの、セミナー委員とそれ以外の学生との連携がうまくいかずに頓挫してしまった経緯がある。本年度は、小委員会のメンバーが中心となって、合唱練習を行うために音楽教室の予約や学生の時間調整をし、年明けから練習を重ねることができた。こうして、多くの学生が積極的に練習に参加することが可能となった。

学外セミナー出発の数日前には、参加する上級生が全員集まり、学外セミナーの行程において各々に割り当てられた役割を確認する作業を行った。

4.6 目的地の下見

昨年度にならって、学外セミナーにおける活動の場となる青少年教育施設の下見を2月下旬に行った。実際に施設を訪問することで、その立地環境や設備を確認し、職員に話を聞くことにより、活動計画をより現実的なものにできると考えたからである。本年度は男子学生4名、および、学部教員2名（第一著者と第三著者）が下見に参加した。加えて、昨年度と異なり、本年度は下見の時点でホテルの予約ができていたため、ホテルにおける食事やパーティなどの打ち合わせも行った。あらかじめ、セミナー委員の学生によって宿泊するホテルと青少年教育施設に対する質問事項が準備され、それらの質問事項は訪問前にそれぞれにファクシミリにより送信されていた。また、ホテルから施設まで、また、施設から高松大学までの自動車による所要時間が測定された。

ホテルにおいては、主に、食事の内容についての相談や、パーティ会場の舞台やテーブルの配置、照明・音響設備の確認を行った。青少年教育施設では、宿泊室や浴室、体育館、運動場、キャンプファイヤ場などの活動場所の確認、宿泊や食事の際の注意事項など詳細にわたって打ち合わせがなされた。打ち合わせにおいても、参加学生が中心となって行われた。下見で撮影された写真やビデオは、打ち合わせの記録とともに会議の資料とされ、それをもとに活動計画が練り直された。

4.7 学外セミナーのしおりの作成

本年度はしおりの表紙を飾るキャッチフレーズが公募され、協議の結果、「君に見せたい子ども発達がある」に決定した。このキャッチフレーズは本年度の学外セミナー全体を通したテーマとなった。また、次節において説明する、学外セミナー3日目の最後を飾る活動である「ハンドペイント」では、「虹」とこのキャッチフレーズが作品の題材となっている。そこで、しおりの表紙には、学外セミナーの活動全体に統一感を出すという意図のもと、虹の絵が描かれている（学生たちの強い要望により、表紙だけはカラープリンタで印刷された）。

本年度は昨年度に比べて、しおり作成においてもセミナー委員における役割分担が明確であり、時間的に余裕をもって作成に取りかかることができた。その分、昨年度よりもしおりの完成度が高かった。昨年度と同様、新入生用のしおりと上級生用のしおりは別々に作成された。新入生用のしおりには、簡単な旅程、必要な持ち物、一般的な注意事項、ホテルや施設の部屋割り、各種活動でのチーム編成などの情報が掲載されていたが、上級生

用にはそれらに加えて、「誰がいつどのような仕事に携わっているか」がわかるような詳細にわたる活動プログラムが掲載されていた。上級生用のしおりに挟まれている「担当表」をみると、全員が何らかの役割を担っていることが見てとれるようになっている。また、新入生用のしおりに、上級生全員の名前が記載されているスタッフロールのページが挿入されており、上級生全員でこの学外セミナーを創っているということが伝わるように工夫されている。

5. 平成20年度新入生学外セミナー実施の概要

本年度の学外セミナーは4月11日（金曜日）から13日（日曜日）の日程で実施された。先にも繰り返し述べたように、本年度はセミナー委員だけでなく、学年全員で新入生を歓迎しようという体制を整えることを目標としてきた。学外セミナーで行われた活動の司会進行、準備などにおいては、あらかじめ決められた分担のもと、セミナー委員以外の学生も活躍の場を与えられている。また、教員もそれぞれの活動において、挨拶の言葉や感想を述べる役割を担っている。本年度の学外セミナーで行われた活動のうち主なものについて、学外セミナーの下地作りとして出発前に行われた茶話会も含めて、以下で紹介する。

5.1 茶話会（4月7日）

学外セミナーに出発する前に、参加するメンバー同士がある程度顔見知りになって、気軽に声かけられるような関係をつくっておくというねらいで、4月はじめのオリエンテーション期間中に、新入生、計画を練ってきた新2年生、および、発達科学部教員全員が参加して、お茶やジュースとお菓子を楽しみながら、親睦を深めるという活動が茶話会である。昨年度も行われたが、3月末に急遽開催することを決定したため、十分な準備ができなかった。本年度は、上述したように、茶話会のための小委員会を設置し、十分な時間と人数をかけて計画された。具体的には、小委員会に参加したメンバー（セミナー委員以外で約10人）を中心に、テーブル配置、ゲームの考案・準備、名札の作成、お菓子やジュースの買い出しなどが行われた。作成した名札は、学外セミナーにおける諸活動でも使用された。

また、茶話会終了前には、学外セミナーのしおりが新入生と教員に配布され、セミナー委員代表から学外セミナーの説明が行われた。

5.2 パーティ（1日目夜）

初日に宿泊するホテルで夕食をとりながら、パーティが行われた。本年度は下見にて十分な打ち合わせができており、また、昨年度の反省を生かしてパーティの開始時間と終了時間を遅らせるようにしたため、準備やリハーサルが順調に進んだ。パーティでは、十分に食事時間をとったうえで、4つのゼミのうち2つのゼミの出し物（クイズ形式）、有志によるダンス、上級生全員による合唱が行われた。

パーティでは、限られた時間の中で、どのように新入生を楽しませることができるか、また、どのように上級生の団結力を見せることができるかがポイントとなった。パーティの構成は、合唱をのぞき、昨年度とほぼ同じ内容であったが、より新入生を楽しませることができるような出し物はないかと検討された。例えば、クイズ形式の出し物の一つは、パーティ会場内にあらかじめ隠された不自然な点を捜すという大がかりなものであり、半数以上の上級生や数人の教員、また、ホテルの従業員までもが、すぐにわかりそうなものから、なかなか発見できそうにないものまで、その不自然な点を演出し、基本的には新入生に答えてもらうといったものであった。司会進行、クイズ進行のための寸劇、必要な小道具などの準備が入念になされていた。実をいうと、実行前は、新入生が積極的に会場内にある不自然な点を探しまわってくれるかどうか不安だったようで、まずは上級生が簡単なものを答えて、新入生が答えやすい雰囲気をつくらうという計画まで立てていた。しかし、クイズがはじってみると、新入生は我先にと会場中に散らばり、そして、解答するためにマイクを奪い合った。

パーティの出し物で、昨年度との大きな違いは、合唱があったことである。先にも述べたように、数ヶ月前から時間を見つけては練習を重ねた。春期休業中においてもその練習を怠ることはなかった。その努力の積み重ねは、合唱の技術に反映されただけでなく、2年生同士の団結力を強くすることになり、また、パーティでの合唱の成功は、彼らにとって大きな達成感と充実感を得る結果となったと思われる。同時に、その努力は、感動となり新入生の胸に届いていたに違いない。

5.3 運動会（2日目午後）

2日目に青少年教育施設に到着し、昼食をとった後、運動会が開催された。体育館、および、運動場にて、「障害物競走」、「玉様ドッジボール」、「綱引き」、「リレー」が行われた。昨年度よりも競技が増え、充実した内容となっている。これらの競技のルールやチー

ム編成は前もって検討され学外セミナーのしおりに掲載されている。上級生はあらかじめ決められた担当に別れて、それぞれの競技の準備・運営を行った。ちなみに、雨天の場合は、すべての競技を体育館で行う予定であった。

チーム編成には、競技ごとにいくつかのパターンがあった。例えば、王様ドッジボールでは、上級生と新入生がチームを組み、交流を深めながら、戦術について作戦を練った。また、リレーや障害物競走では、各学年のゼミごとにチームが編成された。特に、新入生はゼミに所属したばかりであり、これらの競技を通して、新しい友人の様々な面に気づきながら、ゼミ生同士の連携を強めることにつながったと考えられる。

5.4 キャンプファイヤ（2日目夜）

運動会が終了し、夕食をとった後、キャンプファイヤが催された。昨年度は、希望者だけがいくつかのたき火を囲み、談話するという活動であったが、本年度は学生からの要望で本格的なキャンプファイヤが実施された。キャンプファイヤでは、2つのゼミ（初日のパーティで行っていないゼミ）によって出し物が行われた。それらは、キャンプファイヤの大きな火を囲んでいるとはいえ、4月はじめの寒空のもとで行われることを考慮して「人間知恵の輪」と「フォークダンス」という体を動かす活動であった。薪に点火するための方法、司会進行などにおいても学生のアイデアがふんだんに盛り込まれていた。ちなみに、今回は天気にも恵まれたが、雨天の場合は、室内でたくさんのろうそくを囲み、人間知恵の輪とフォークダンスを行う予定であった。

キャンプファイヤにおいては、上級生のリードのもと、教員を含めた全員が一緒になって活動を行い、手と手を触れ合わせ親睦を深めた。

5.5 ハンドペイント（3日目午前）

3日目（最終日）の午前中に行われる最後の活動が、この「ハンドペイント」であった。手に絵の具をつけて、布に絵を描き、作品を完成するというものである。実は、このハンドペイントは、企画の初期段階では「ビッグペイント」という名称で、みんなで大きな布に絵を描き、一つの作品を完成させようというものであった。小委員会のメンバーがその初期計画の詳細について検討し、様々な可能性を考慮した結果、このハンドペイントが、今回の学外セミナーにおける実現可能な案として提案された。ハンドペイントでは、異学年の交流を目的とし、新入生と上級生が入り混ざって、7のグループに分かれて作業を

行った。作品の完成にあたっては注意事項があり、「君に見せたい子ども発達がある」というキャッチフレーズ、虹、各々の手形と名前は必ず入れなければならなかった。また、完成した作品と一緒に、グループごとに写真撮影を行うことが告げられた。各グループにおいては、作品の構図、虹や文字の配色、手形の位置、写真撮影の際の位置取りなど、様々なことを相談する必要性があったため、グループのメンバー間で活発な意見交換がなされた。グループメンバーが一体となり、一つの作品を完成させていく過程で、小さいグループではあるものの、異学年メンバー間のより深い交流が実現できたと思われる。

6. 平成20年度新入生学外セミナーの評価

昨年度と同様に、学外セミナーから帰ってきてまもなく、その反省会が行われた。まず、企画・運営した上級生（新2年生）、次に歓迎された新入生のそれぞれの反省会で出た意見について要約する。また、教員に対して行ったアンケート結果も付記する。

6.1 上級生（平成19年度入学生）による評価

反省会も学生主導で行われた。反省会の過程においては、肯定的に評価すべき点はもちろんたくさんあったが、企画・運営をした学生たちだけあって、反省点が多くあげられた。茶話会では、盛り上がる事ができた点はよかったが、準備不足が目立ったという意見があがった。特に、話題作りのために用意したゲームが盛り上がらなかったグループや、座席配置に問題点が見られたグループがあったようである。

学外セミナーの移動中のバスでは、クイズなどをして大学や教員のことを知ることができてよかったが、教員のバス乗車人数に偏りがあったり、2年生だけで盛り上がってしまったことなどの問題点があげられた。

パーティにおいては、昨年以上に盛り上がったが、出し物の準備不足が目立ち、運動会については、競技が楽しかったが、競技ルールを変更すべき点があったり、教員が参加できるような競技を用意したりすべきだったという反省があった。キャンプファイヤでは、フォークダンスなどゼミの出し物がよかったとのことだが、リハーサルを行なえなかったことや、点火の段取りの悪さなどの準備不足が指摘された。最後にハンドペイントでは、新入生との交流はできていたものの、説明の際に声が小さくてわかりづらかったり、制作に必要なパーツが抜けていたり問題点もあった。

6.2 新入生（平成20年度入学生）による評価

平成21年度新入生学外セミナーに向けて準備を進めるべき新入生においては、次年度の学外セミナーの企画・運営をすることを意識しつつ、反省がなされた。

まず、全体的に、肯定的な意見が中心となった。パーティでは学年関係なく盛り上がったという意見があげられ、中でも合唱に対する評価が高かった。また、運動会の競技を通して、同学年で交流や上級生との交流を楽しんだことがあげられた。キャンプファイヤでもフォークダンスが楽しかったという意見が多く、ハンドペイントでは上級生と協力して作品をつくったことに対する評価が多数あげられた。反省点としては、バスの中の出し物が盛り上がり欠けたこと、キャンプファイヤ後のお風呂の時間が短かったことや施設出発前の掃除の説明が不十分だったことなどの意見があげられた。

また、学外セミナーの全行程において、上級生の気配りと思いやりが感じられたことや、教員に頼ることなく学生の意志で行動していたことも高く評価されていた。様々な活動でたくさんの異なる上級生が代わる代わる中心となって活動していたことに驚きを隠せないという意見もあった。そして、なによりも、「友達のいろんな面が見られた」、「みんなと協力して仲良くできた」など、新入生同士、上級生との交流が深まるよい機会となったようである。

来年度の学外セミナーに向けては、細かい反省点について改善していくのはもちろんのこと、この行事を伝統にしてよりよいものをつくっていききたいという意見が多くあげられた。

6.3 教員による評価

教員に対するアンケートは、主に「評価できる点」、「今後の改善点」、「学外セミナー前後で新入生・新2年生の態度・行動で変化を感じた点」の3項目について、4月下旬に行われた。学外セミナーに参加したすべての教員から回答が得られた。

(1) 評価できる点

まずあげられるのは上級生（新2年生）の組織力であった。新入生を歓迎するための活動が綿密に計画され、組織的に運営できているとの評価であった。「昨年度の反省を生かして、実際にそれを修正し実行することは非常に難しいことだと思うが、それがなされて

いたと感じる」という意見や、「主体的に行事企画に関わり、反省すべき点は反省していた」という意見からも、その計画実行に対する高評価が伺える。学生がやる気を持ち、全員で何らかのかたちで関わるという経験が学年集団の凝集性を高めると感じている教員も多い。また、この行事が発達科学部の伝統になればよいとの意見も多数あった。ただ、併せて、この学生の企画・運営による学外セミナーの基礎を築いた第一期生も評価したいとの声もあった。

(2) 今後の改善点

大きく、「活動内容に対する改善」と「教員の関わりに関する改善」があげられた。前者に関しては、「USJでは学生間の交流が限られており、セミナーとしての意義が小さい」、「大学生活についてのグループディスカッションなどが行なえないだろうか」、「もう少し学生間の交流が可能となる活動を増やせないだろうか」などであり、後者は、「もう少し教員と学生が関われるような工夫ができないだろうか」、「教員側の組織が全く見えない」などであった。

また、ホテルでのマナーについてのガイダンスの必要性や、説明の仕方の練習の必要性などもあげられた。加えて、このような実践過程や結果をノウハウとして蓄積することを求める意見や、3年次生もセミナー（就職指導などの内容）を行う必要性を感じるという意見もあげられた。

(3) 学外セミナー前後で新入生・新2年生の態度・行動で変化を感じた点

新入生においては、一般的には「新入生は人間関係で不安だったと思うが、学外セミナーでだいたいの相互理解はできたのではないか」、「新入生のゼミ活動における積極性、一体性が増したように感じる」などがあげられた。また新入生が上級生（新2年生）に対し、尊敬に似た気持ちを抱くようになり、これから学外セミナーの企画に携わることについて上級生が組織的に活動したことを目の当たりにした新入生からは、これと同じこと（またはそれ以上のこと）を来年度は自分たちの手でしなければならないという「当事者意識」が感じられているようである。

新2年生については、「成長した」と感じられており、「発達科学部子ども発達学科を学生の居場所としてとらえてくれているのではないか」という意見があがった。新2年生の全員を巻き込むことができた、学外セミナーの企画・運営に関連する諸活動を通して、彼

らにとっての発達科学部が、単なる所属集団から準拠集団へと発展したといえるかもしれない。

7. 全体的考察—今後に向けて

7.1 学外セミナーの教育効果

新入生学外セミナーの企画・運営に関係する様々な活動を通して、学生たちは主体的に活動しながら集団をリードする体験をし、その中でコミュニケーションやリーダーシップの重要性を学んでくれたに違いない。このような体験は学生の人間的成長にとって有意義なものであると信じている。特に学外セミナー委員については、企画・運営に深く携わっているために、サポート教員から（たまたま、心理学専門の教員であったため）コミュニケーションやリーダーシップについて学ぶ機会も少なからずあった。学外セミナーにおける諸活動の企画段階においては、学外セミナー委員以外の学生との意見調整などを通して、教員から学んだことを実践する機会も非常に多い。学外セミナー委員として活動することは、学生の社会性や指導力、人間関係調整能力を育てる貴重な場となっていると考えられる（栗田，2001）。もともと学外セミナー委員に立候補するような学生については、立候補すること自体が少なくとも自らの意志・判断で行動しようとしていることの現れであるために、先に述べたような「主体性の低下問題」はあてはまらないかもしれない。しかし、昨年度において長期にわたる企画の段階で、脱落していくセミナー委員が数人いたことは、「やろう」とする意欲と実際にやり遂げることのギャップを示しているように思える。セミナー委員に関しては、自ら考案した企画が実際に採用され、実行に移されることで達成感を味わうことができるだろうし、このような体験を通して、自分の行動によって結果を左右できるという統制感を身につけていこう。

また、新入生学外セミナーは新入生同士、新入生と上級生（2年生）の「出会いの場」となり、その後の友人関係の構築に少なからず影響を及ぼすと考えられる。新入生は大学生になった喜びや新しい生活に対する期待を感じると同時に、大学生活という新奇な環境に対する緊張や不安なども感じる。親しい友人の存在が、大学生活という大きな環境の変化に適應する際、緊張や不安、戸惑いや寂しさなどを緩和し、結果として大学生活の肯定的な評価につながる（梅本，1992）。新入生の友人関係は、入学後1ヶ月間という短期間で急速に発展すること（古川・藤原・井上・石井・福田，1983）、また、新入生の多

くは学外セミナーのような機会に他者との交流を期待していること（出野ら，2003）を考慮すると，4月上旬に学部の1年生と2年生全員が参加して行われる学外セミナーが新入生の大学生活における新しい友人関係構築の機会として果たす役割は大きいだろう。

上述したような学外セミナーの企画・運営に携わることによる教育効果，および，新入生の間人関係をベースとした大学生活を円滑にするための効果などは「初年次（一年次）教育」，または，「導入教育」として扱われるものである。様々な研究（例えば，藤田，2002；山田，2005，2006）でその重要性が指摘されているものの，その後の2年次以降の教育とどのように有機的に結びつけていくのかが大きな課題となっている。新2年生に関しては，約1年間にわたって新入生学外セミナーの企画・運営で培われたと期待される主体性や，その運営から得られた達成感・充実感をそれ以降の大学生活に生かし，そして，「先生になる」という将来の夢につなげることが，その意義を問う際に重要になる。

7.2 学生組織の必要性

このように学生が学外セミナーを企画・運営することは，学生全体，特に学外セミナー委員にとって様々な教育効果をもたらすことが期待される。しかしながら，セミナー委員自体も人数に限りがあり，すべての学生が同等に体験できるものではない。また，4年間にわたる大学生活を考えると，2年次以降でもこのような体験の場を提供する必要があると思われる。発達科学部では，平成20年度から「ゼミ連絡会」とよばれる組織を立ち上げ，学生の主体的活動をますます促進させる試みを開始した。新入生学外セミナー委員会もこのゼミ連絡会の下部組織の一つとして位置づけられた。このほかに，本年度においては火曜日の5校時を中心に学生の交流などを目的とした行事企画を考案するための「行事企画委員会」，オープンキャンパスにおいて発達科学部の効果的な紹介方法を検討する「オープンキャンパス委員会」，発達科学部主催で，本年度の大学祭において地域の子どもたちを招いて開催する企画について検討する「げんき村わんぱく通り委員会」など様々な委員会が設けられ，2年次以降の学生にも活躍の場を提供している。そして，昨年度の学外セミナーの企画・運営で中心的な役割を果たし，本年度の企画・運営においてもよきアドバイザーとして学外セミナー委員をまとめ上げた3年生の学生が初代ゼミ連絡会長を務めている。

7.3 教員のサポートの必要性

全く何もないところから自主的な活動は始まらない。本稿で取り上げた学外セミナーの

ように学生側から主体的な活動の芽生えが感じられれば、教員はそれをくみ取り、そしてサポートしていく必要がある。そのサポートに関しても、教員が自らの経験を生かして、それを最大限に発揮しなければならず、簡単にできるものではないかもしれない。本年度は、ゼミ連絡会が発足し、発達科学部の学生が主体的に活動する機会も急速に増加している。発達科学部教員に望まれていることは、各教員の個性や特長を生かし、学生の主体的な活動を支える体制をできるだけ早く整えることであろう。

7.4 来年度の学外セミナーに向けて

歓迎されたばかりの新入生は来年度の学外セミナーに向けて、平成20年4月下旬にはもうすでに動き出しており、来年度に向けて着々と準備を進めている。会議には本年度活躍した2年生のセミナー委員数名が継続して参加し、また、サポート教員も2名（これまでとは別の教員）になり、新1年生の学外セミナー委員に対する支援体制は整ってきた。実は、4月中旬に新1年生の各ゼミナール（本年度は6つのゼミナール）から2人ずつの学外セミナー委員の募集を行ったとき、これまでとは異なる問題が起きた。セミナー委員に立候補する学生が多すぎたのである。このことは本年度の学外セミナーに対する評価の高さが新入生をやる気にさせたためなのか、それとも、これまでもオープンキャンパスにおける学部説明で学生の主体性についてアピールしてきたために、そのような志向の学生が多く入学してきたからなのかかわからない。ともかく、学部の目標にとっては、よい傾向であることに変わりはない。来年度においても、学生主導のもと、本年度以上に充実した学外セミナーになることが期待される。

7.5 実証的研究の必要性

今後の課題としてあげられるのは、上述したような新入生学外セミナーの新入生に与える影響も含め、実際に、学生が学外セミナーの企画・運営に携わることで、その主体性を高め、学生主体の文化の形成につながっているかどうか、また、リーダーシップやコミュニケーションについてどのようなことを学び、どのように学生の将来に生かされるのかなどに関して、学生の企画・運営による新入生学外セミナーの教育効果を検証することである。これらについて様々な側面から実証的に研究する必要性があるだろう。

8. おわりに

本年度の新生学外セミナーは、新生や教員の評価からもわかるように、平成19年度入学生一人ひとりが、計画から実行にいたるすべての段階において知恵を出し合って、創意工夫を重ね、そして、新生に対する心配りを怠らなかったおかげで成功を収めることができたといえよう。ここで忘れてはいけないことは、彼らの1年先輩である第一期生（平成18年度入学生）がこの学外セミナーの礎を築いたことである。第一期生による新生を自らの手で歓迎したいという熱意がなければ、学生の企画・運営による学外セミナーは存在しておらず、今年の成功はあり得なかった。

あの朝、出発前に発達科学部新生の大きなかばんに詰まっていたいろいろな不安のほとんどは学外セミナーの過程で自然と消えていったに違いない。もしかばんの中に少しの不安がまだ残っていたとしても、その後の大学生活でその不安を解消するために重要な役割を果たすだろう友人や先輩との人間関係を学外セミナーで発見してくれたのではないだろうか。そして、平成20年度新生たちは、目下、「今度は自分たちが楽しませるんだ」という希望を胸に、来年度の新生のための学外セミナーの準備を仲間たちと一緒に進めている。

今にして思えば、出発前、大学正面玄関に集合していた2年生のかばんは新生のものよりいっそう膨らんで、どれもはち切れそうだった。もちろん、そのパンパンに膨らんだかばんの中には運動会などの各種活動に必要なもの、ダンスの衣装、パーティの小道具など新生のかばんには入っていないようなものが詰まっていた。また、それらと一緒に、「新生を楽しませたい」という大きな期待、そして、「うまくいくのかな・・・」という不安も詰まっていただろう。その大きなかばんは、学外セミナーにおいて自分たちで計画した行事を一つ一つ成功させていくごとに、だんだんと軽くなっていったに違いない。しかしながら、帰路につく彼らのかばんは、出発前にも増してパンパンで、はち切れそうだった。そこには、道すがら軽くなった分量以上の達成感や充実感が詰め込まれたのだろう。第一期生が撒いた種は、平成19年度入学生の献身的な努力のおかげで笑顔の花を咲かせ、見事に実を結んだ。

今、学生たちが毎日の大学の講義にもってくる小さなかばんの中にも、あのときの種が入っており、それが彼らの日々の大学生活において大きく育ててほしい・・・という密かな期待を抱いている。

9. 謝辞

本稿をまとめるにあたり、新入生学外セミナーならびにアンケート調査に参加し、ご協力いただいた高松大学発達科学部の教員の皆様に深謝いたします。

*本事業は、私立大学教育研究高度化推進特別経費 教育・学習方法等改善支援経費「ゼミ活動を基盤とした潜在的カリキュラム形成」によるプロジェクトである。

引用文献

- 荒井克弘・鈴木規夫・柳井晴夫 (1999). 大学生の学力低下に関する調査結果について 日本行動計量学会第27回大会発表論文抄録集, 179-180.
- 浅野誠 (2006). ワークショップガイド アクアコーラル企画
- 中央教育審議会 (1996). 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (答申)
- 中央教育審議会 (2005). 我が国の高等教育の将来像 (答申)
- 藤田哲也 (2002). 京都光華女子大学における導入教育 - 「大学基礎講座」 - 京都大学高等教育研究, 8, 131-147.
- 古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井真治・福田廣 (1983). 新環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達の研究 心理学研究, 53, 330-336.
- 市川伸一 (2002). 学力低下論争 ちくま新書
- 出野慶子・関島英子・工藤美智子・宇良俊二・梶原祥子・斉藤益子 (2003). 新入生オリエンテーションキャンプの評価 東邦大学医学部看護学科・東邦大学医療短期大学紀要, 17, 34-45.
- 石井秀宗・柳井晴夫・椎名久美子・前田忠彦・鈴木規夫・荒井克弘・大竹洋平 (2005). 大学生の学習意欲と学力低下に関する教員の意識についての調査研究 大学入試センター研究紀要, 34, 19-58.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2004). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (3) - 出身校, 居住形態との関連から - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 3, 57-68.
- 栗田充治 (2001). 事例紹介 学生と創る新入生オリエンテーション 大学と学生, 440, 27-32.
- 人間力戦略研究会 (2003). 人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ, 意欲を高める - 信頼と連携の社会システム -
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (2) - personalityとの関連から - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 73-82.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2005). オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 4, 75-86.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2007). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 4, 75-86.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (1) - オリエンテーションに対する態度の基礎データ - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 59-71.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2008). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生生活満足感との関連性について (2) 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 7, 47-56.
- 関豪 (2003). 課外活動に関する本学学生の実態について (1) 名古屋文理大学紀要, 3, 133-146.
- 高塚順子・山野邦子・関由佳利・水口文吾 (2008). 秘書科における導入教育のあり方 - 在学生への

- アンケートをもとに－ 高松大学紀要, 49, 13-57.
- 武田直仁・井藤千裕・岡本浩一・小嶋仲夫・原脩 (2004). 名城大学薬学部における新入生学外オリエンテーションの実施と評価－薬学導入教育の一つとして－ 名城大学総合研究所紀要, 9, 13-18.
- 梅本信章 (1992). 大学新入生の適応について－自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連－ 盛岡大学紀要, 11, 27-38.
- 山田礼子 (2005). 一年次(導入)教育の日米比較 東信堂
- 山田礼子 (2006). 教育の効果を上げるために－導入教育の意義－ 大学時報, 55, 50-57.
- 全国保育士養成協議会 (2006). 保育士養成資料集第44号 保育士養成システムのパラダイム転換－新たな専門職像の視点から－